

## 「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」（平成 25 年 2 月）において未検討の課題の協議において出された意見の整理 [平成 27 年 12 月 18 日まで]

○：第 20 回（11 月 27 日）の意見      ●：第 21 回（12 月 18 日）の意見

### I 審議の体制をめぐって

- 現在、漢字小委員会と日本語教育小委員会とに分かれているが、コミュニケーションの在り方について審議していこうとなった場合に、対外国人と国内といった形で分科会を分けるという可能性はあるか。

### II 審議の進め方をめぐって

- 「公用文作成の要領」の見直しをやっていると、それでまた 1 年掛かるのではないか。すると、言葉遣いとコミュニケーションについてはいつ取り掛かるのだろうかということになる。それだけに審議する優先順位について明確にしていく必要がある。
- 「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第 4 次基本方針）」で、コミュニケーションと言葉遣いについては、「国語の正しい理解」の 3 番目のところに、「敬語に関して、具体的な指針の普及を図るとともに、「言葉遣い」や「コミュニケーションの在り方」について検討し、その成果の普及を図る。」と一緒に挙げられている。上に書かれているものから順序よく取り組んでいくという大方針があるのではないかと考える。
- コミュニケーションという課題で、いろいろな要素を取り込みながら整理していくことも、この時点では喫緊の課題である。ここから離れてしまわないようにして、一番大事なことはどこかということをきちんと議論して、そこから国語分科会として扱える範囲で議論していくというのが、筋ではないか。
- 本丸であるコミュニケーションに関する議論に入っていないと、また最初から「国語分科会で今後取り組むべき課題について」を話し合わなければいけなくなってしまうことが、非常に怖い。

### III 「「公用文作成の要領」の見直しについて」をめぐって

- 事務能率の改善という点で「公用文作成の要領」は成果を得ていると考えるが、分かりやすくするために、どのような工夫があるかということについて、「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第 4 次基本方針）」では、外来語などが増えてきているといったことも含めて「公用文作成の要領」を分かりやすく見直していく必要があると書かれている。「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」において、1 番目に挙げているのにもかかわらず、最初に取り掛からなかったところに、一つ問題が

ある。

- 「公用文作成の要領」は、他の部署との調整が必要だということだが、その調整の段階の様子がよく分からない。どこまで進んでいて、どのようなことが問題なのか。
- いろいろ各省庁等の実態などがあってなかなか難しいということであるが、現代にふさわしい公用文の書き方といった理念から考えるということ捨てたくはない。ただし、現実的なやり方として、例えばもう少し部分的に見直すといった実務的なところから取り掛かることはできるのではないか。
- 公用文とかビジネス文書がほとんど横書きになったのは、この「公用文作成の要領」によるにもかかわらず、「公用文作成の要領」の中で横書きに関して述べている部分は本当に少ない。
- メールやブログなどは横書きなので、横書きの書き方のようなことに取り組むこともできるかと思う。例えば横書きだと、漢数字ではなく算用数字を使うことが多くなるが、漢数字と算用数字の使い分けなどは、割に、国民が知りたいところ、そして迷うところである。

#### IV 「常用漢字表の手当てについて」(「同音の漢字の書きかえ」の見直しについて)をめぐって

##### 【かんじん】

- 「かんじん」の「じん」に関して、現段階で、新聞協会では、従来どおりの「心」を使うことになっている。これは、いろいろ検討した結果、単なる書換えではなくて、「心」を使う表記もかなり古くからあるということと、新しく入った「腎」は臓器の名前の標記に用いたいという趣旨だったのではないかということ、目になじんで、しかも比較的簡単な「心」の方を使うということからの判断である。

##### 【もうどう】

- 「妄」の字は、「妄想」とか「軽挙妄動」などで使う漢字である。「軽挙妄動」という熟語の意味を考えたときに、心情としては、やはり、「盲」の字は使いたくない。もしかしたら、これは差別的な発想にまでつながりかねないのではないかと思う。
- 「盲」は、差別的な発想に通ずるので、この字だけを見ると使いたくないが、言葉として使うときは、一々、字の意味を思い浮かべたり、遡って考えたりするということはないはずだと思うので、今までの習慣を大きく変えるほどのこともないのではないか。
- どの程度漢字に対する知識のある方かによって「盲」という字に対する受け止め方は違う。
- 「盲」という字が常に差別的な意味を持っているとすれば、「盲」という漢字そのものを消してしまう方がいいという意見も出ないわけではない。うっかりすると、言葉狩りではなく、漢字狩りに発展する可能性もあるのではないか。
- 元々「盲」で書かれていたものを、「妄」に変えるということではないわけなので、

これは漢字狩りではない。「妄」でいいのではないか。

- 後れて国語政策の中に採用された「妄」の字が公的に使えるようになったために、「妄」を使った用例が次第に増えてきているという傾向、動きがあるということも、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の検索結果から読み取ることができよう。
- 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の「少納言」で、「軽拳妄動」でどう書いているかということを見ると、全て「妄」を使い、19例示していた。「軽拳妄動」だと、「盲」の字は使わない。一般的に割と、「妄」の字を使っているのではないか。

#### 【まとめ】

- 1981年に、「磨」が常用漢字に入ったので、次第に磨くという意味を持つ熟語については、「磨」でという表記法が増えつつあるのだろうと考えられる。

#### 【しょくじん】

- 「蝕<sup>しよく</sup>甚」は大変専門的な用語のようで、恐らく今だと「ピーク」などと言っている。そういった情報も欲しい。

#### 【全般】

- 特に常用漢字と衝突はしなくても、既に定着してしまっていて掲げるに足りないものもあれば、新たに「きょしゅつ」のように掲げた方がいいものもある。そういうものも含めて、同音の表記があるものについて、その選択の目安を示すというような形で、「同音の漢字による書きかえ」を新たに検討することは、「常用漢字表の手当て」という趣旨にもかなうのではないか。
- 「同音の漢字による書きかえ」について、単なる常用漢字と衝突する部分だけを手当てするのではなく、もう少し現代に合った形で使いやすいものにしていくとすれば、「公用文作成の要領」の見直しの狙いにも通じる。
- 「同音の漢字による書きかえ」は、制限的な当用漢字の時代のもので、漢字使用の緩やかな目安の常用漢字とは性質が異なる。
- 公用文の世界で齟齬<sup>そご</sup>が出た部分を変えることはかまわないが、「同音の漢字による書きかえ」を残すことは、漢字制限の考え方を引きずっているとの誤解を受けかねない。
- 同音の漢字を「常用漢字表」の趣旨の中で、必要であるかどうかも含めて捉え直す必要がある。
- 「同音の漢字による書きかえ」に挙がっていないものも含めた表記の揺れの整理という形で取り組むのも方法であろう。
- なるべく一つの単語は一つの表記形式で書くのが最も効率的で望ましい。それだけに、わざわざこういう表記もよいと注記したり、推奨したりする必要はないのではないか。
- やり方としては、制限的な当用漢字時代とは違うということを踏まえながら慎重にやっていく必要がある。

## V 「常用漢字表の手当てについて」(常用漢字表の定期的な検証について)をめぐって

- 学習指導要領では、送り仮名の付け方を極めて重視しており、送り仮名を示されたとおり送らないと誤りとされる。その結果、例えば、花が「咲く(さく)」だったら、「咲」という漢字は「さく」という語ではなく、「さ」だと思ってしまう子供がたくさん出てくる。大人でも同様である。送り仮名の付け方を厳密に扱おうとすればするほど、漢字が、表意、表語だというところが薄れてしまう。だから、本来は常用漢字の手当てという意味では、語がどのように、その常用漢字の漢字が書かれているのか、特に訓まで、きちんとこの常用漢字表の精神が伝わっているかどうかということを検証すべきである。

## VI 「言葉遣いについて」、「コミュニケーションの在り方について」をめぐって

- ここは漢字小委員会なので基本的に書き言葉についての議論をしているが、これまでに、国語審議会の時代から、話し言葉、音声言語についての議論もしてきてはいる。ただし、それは敬語が中心であった。コミュニケーションも含め、敬語以外のことに関しては余り具体的には議論されていない。
- 今の日本の書き言葉は漢字仮名交じり文で書くということになっている。書き言葉では、漢字を用いることができるため、高度の知識を扱い、それを伝達することができる。しかし、高度の知識というものが、書き言葉にほとんど依存してしまっていて、話し言葉だけでは十分に表しきれないという、つまり漢字という文字がないときちんと伝達できないという問題があるのではないか。
- 話し言葉、つまり音声言語の方でより知的な深さをきちんと伝えられるようなものにしていく努力が、日本語においては必要だという気がする。
- コミュニケーションに関して言えば、客観的にとか、論理的にとか、話し言葉、音声言語でより情報伝達がきちんとできるようにするにはどうしたらいいかということを考える必要があるのではないか。ただ、具体的な方策となると、それはいろいろ難しい問題はあると思う。
- 漢語は同音が多いということもあり、和語の重要性ということがある。同音の漢字の使い分けは、話し言葉では全然問題にならないが、漢字を習得されている人はその漢語の同音の区別がかなりできる。そうでない場合には、和語を生かした話し言葉で、きちんとしたニュアンスの違いが言えるような表現を、大切にすべしである。
- 和語で表現するということは、恐らく非漢字圏の外国人、漢字が難しいと感じている人にも関係することである。公用文書の中での外来語、英語をそのまま入れるような風潮にも関わる。漢字に頼りながらも、元々そうではない、聞いて分かるような言い回しを工夫する必要がある。
- 書き言葉においては漢字を使うので、和語が出てきても、それを訓読みの漢字で済ませている。結局、音声として和語が体験できないというシステムになっている。そ

うすると、漢語や漢字に和語が隠されてしまい、どこにあるのか分からなくなってしまふ。そういうのは日本語の一種の危機である。ただ、もちろん漢語は全く不必要だということではなく、それを捨て去ることはできないが、それと和語による表現力をいかに調和させていくかということは、国語問題としては非常に大事なことである。

- 話し言葉、コミュニケーション、どちらも非常に漠然としたカテゴリーでの話だと思ふ。その中からどこかに絞っていかなければいけない。世代ごとという切り口も考えられる。かつては使った言葉だけれども、今は使わなくなったものや、「なので」のように、今や大半の人が使用しているけれども、抵抗感のある人もいるという言葉を取り上げていくなどが考えられる。
- コミュニケーションは共通言語を持つところから始まるので、「やばうまい」が使える人同士はコミュニケーションを取れる。逆に使えない人とはコミュニケーションが取れないという現実も、一部出ている。今後何かそういうものに関する調査があるのであれば、それを何らかの形で活用していかないともったいない。
- コミュニケーションというと、非常に漠としていて、哲学、政治学いろいろなバックグラウンドによって捉え方が違う。例えば 2006 年の経済産業省の「社会人基礎力」は、コミュニケーションを細かい三つの能力と 12 の要素に分けている。小学校、中学校、高校でも、今、ルーブリック評価を使用し、細かく能力を分けながら一つ一つスキルを育成していくというような考え方もある。文字の面と、対面で会話をするといったいろいろな面があると思ふ、コミュニケーションについても、それを要素に分けて少しずつ議論を進めていくというのはどうか。
- コミュニケーションの中で、例えばフォーマットの検討ということであれば、「公文作成の要領」に関わるような内容を、また言葉そのものは言葉遣いということで扱っていきける。

## VII 「その他」をめぐって

- 従来型の調査が本当に実際に反映できているのかを検証することは難しいと思ふが、立ち止まって考える必要があるのではないか。特にコミュニケーションやウェブ関連は、アンケートが回ってきてても本音を書かないので、面倒臭いから、適当に書いておこうというものもあれば、あえていい加減なことを書くものもある。今までの調査方法が適切かどうか一度疑いの目で見ることが必要である。
- 調査方法に関して、少しまた別の角度から、「意味も分かりますか」といったようなことも尋ねられれば、より立体的に実態が分かるかもしれない。
- 例えば「鬼のように混んでいる」、「やばうまい」といった、言葉のポップさが、今の時代はすさまじい。「すさまじい」というのは、嫌な意味でもすさまじいし、刺激を受けるという意味でも非常にすさまじい。それだけに、何か残したい、拾っておきたいという気持ちがある。